

上杉雅之（監），辛島千恵子（編）

イラストでわかる発達障害の作業療法

加藤 寿宏

（京都大学大学院，作業療法士）



発達に課題がある子どもに対し，OT が小児専門の福祉施設や医療施設以外でかかわる機会が増えている。一般病院や訪問看護ステーション，児童発達支援事業・放課後等デイサービス等，子どもが住む地域で作業療法を受けられるようになったことは喜ばしいことである。しかし，卒前教育で専任教員から十分な講義を受け，かつ長期の臨床実習を経て，職に就ける OT 学生は少ないのが現状であろう。子どもが大好きで，子どもの作業療法に魅力を感じるが働くには自信がない。実際に働きはじめたが，自分の行っている作業療法に自信がない，という人も多い。本書は，若い OT と学生，実習指導者を主な対象として書かれた書である。

本書はイラストと写真を豊富に使用し，発達障害（脳性麻痺，発達遅滞等を含めた広義の意味）の作業療法を疾患・障害別に具体的に示している。発達障害がある子どもたちは，同じ疾患であっても一人ひとり個性的で多様性があるが，本書は臨床像，評価，治療のポイントを実に見事にしぼり（一疾患・障害あたり，10～20 ページ）

執筆されている。若い OT や学生は，子どもの多様性に翻弄され，評価，治療・支援の軸がぶれてしまうことが多々ある。多様性を理解するには，軸（対象となる疾患・障害の臨床像・評価・治療）をしっかり理解したうえで，一人ひとりの子どもの個性を理解する必要がある。本書の構成は，まず「エッセンス」でガイドラインを示し，「確認してみよう」で学習の達成度をチェックできるようになっている。また，作業療法の個別治療のみでなく，ホームプログラムに関しても記載されている。子どもと出会う前に，自身で基礎理解がどの程度できているかを確認，再確認するには，最適な書である。

作業療法の教科書は，教員が執筆すれば臨床から離れ，臨床家が執筆すれば学生には難しすぎる傾向がある。本書は，養成校の教員と臨床家が半数ずつというバランスがとれた執筆構成になっていることも，ポイントがしぼられ，わかりやすくコンパクトにまとめられている理由の一つであろう。

編集者の辛島氏が本書の序で，「養成校の教員には，作業療法士としてのご経験を盛り込んだ，臨

場感溢れるご講義とともに本書の活用を期待いたします。そして，学生が本書を手にとり，学び，考え，悩みながら発達障害の作業療法のおもしろさを体感して下さることが，編集者にとっての最高の喜びとなります」と述べている。

本書は，発達障害の作業療法のおもしろさを体感できるように工夫されているが，文字やイラスト，写真から伝えられるものには限界がある。臨床場にいる人は対象児・者一人ひとりの顔を思い浮かべながら，本書を活用することで，発達障害の作業療法がよりおもしろいものとなり，教員や臨床実習の指導者は自分自身の経験を語りながら，本書を活用することで，（難しさの中にある）おもしろさを伝えることができる。発達障害の作業療法をよりよいものとするために，そして，その仲間を増やすために，ぜひ活用してほしい書である。

B5 判 256 頁 4,000 円＋税
医歯薬出版 刊
☎ 03-5395-7610